

カナダ、コンフェデレーション詩人とマリタイムの神話 『エヴァンジェリン』との間テクスト性から

荒木陽子

Abstract

Charles G. D. Roberts, a leading poet of the “confederation group” in the late 19th century Canada, reworked the images of “Canada” created by Henry Wadsworth Longfellow’s *Evangeline* (1847) to represent his Maritime homeland. Focusing on two of Roberts’s early sonnets, “Blomidon” (1885) and “Tides” (1890), this article explores the images particularly chosen from the “American epic” to construct the representation of the Maritimes. The examination of *Evangeline*-driven images in his verses initially published in *Century* (New York) shows how Roberts wanted his readers to imagine his own “home.” Readers will find that Roberts put emphasis on the sublime, rather harsh seascape which directs his readers’ attention to the “Acadia destroyed” after the Acadian expulsion (1755), instead of the picturesque idyll emphasized in Longfellow’s work. Such images of the Maritimes, however, may not be consistent with the tourism-oriented images of the area that Roberts as a “local authority” involved in its construction.

キーワード……ロバーツ ロングフェロー エヴァンジェリン カナダ アカディア

1. はじめに

チャールズ・G・D・ロバーツ(Charles George Douglas Roberts, 1860-1943)は、19世紀末のカナダを代表する作家である。ロバーツがしばしば「カナダ文学の父」(the “father” of Canadian Literature)と呼ばれる所以は(Cogswell 1983: 193)、彼が1880年、処女詩集『オリオンとその他の詩』(*Orion and Other Poems*、以下『オリオン』と省略)を出版し、後にコンフェデレーション詩人(Confederation Poets)と呼ばれることになる、同世代の若い詩人の間に芽生えたカナダ独自の文学を形成する動きを牽引したことにあろう¹⁾。例えば、当時カナダを詩や芸術の存在し得ない偏狭の地であると嘆く大学生であった詩人アーチパルド・ランブマン(1861-1899)は、ロ

パーツが沿海州の地名や風景をふんだんに織り込み詠じたその詩集を読んだ際に感じた夜眠れなくなるほどの衝撃とインスピレーションを 1891 年に「二人のカナダの詩人」(“Two Canadian Poets”)において告白している。

若き日にカナダ国内において詩人としての名声を獲得し、1935 年にはイギリス国王から爵位まで与えられるロパーツであるが、彼は 60 年以上にわたる作家生活の大半を、それに似つかわしくない貧困に近い状況で、大量の原稿を売ることによって生活せざるを得なかった。このことは、ロパーツの伝記ならびに、従兄弟であった詩人ブリス・カーマンなどとの文通からうかがい知ることができる²⁾。このように経済的に逼迫した状況下において、ロパーツの野生動物をテーマとした少年向け短編小説は生まれた。そして、彼の執筆したいいわゆる「動物物語」は、20 世紀初頭の北米でイギリスからカナダへ移民し、アメリカに帰化し生涯を終えたアーネスト・シートン(Earnest Thompson Seton, 1860-1946)の作品とともに、ひとつの文学潮流を作り出し、その後長期にわたりロパーツの生活の糧となったことが知られている。

一方、ロパーツは動物物語を書き始める以前の 19 世紀末、アメリカ人観光客向けのカナダ沿海州(旧アカディア)の旅行ガイドや歴史書、そして歴史小説を書くことにより薄給を補った(Cogswell 1983: 206)。そして、当時の作品のなかでロパーツが故郷ニュー・ブランズウィック州(New Brunswick)と同様、ないしはそれ以上にしばしば描いたのが、ノヴァ・スコシア州アナポリス・ヴァレー(Annapolis Valley, Nova Scotia)の風景と歴史であった。彼が 1885 年から 1895 年にかけて、当時ウィンザー(Windsor)にあったキングス・カレッジ大学(University of King's College)において英文学等を教授する職にあったことは、これとは無縁ではあるまい³⁾。ウィンザーは、アメリカの詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー(Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882)が 1847 年に描いた物語詩『エヴァンジェリン—あるアカディアの詩—』(*Evangeline, A Tale of Acadie*)の舞台となり、当時アメリカ人向け観光開発が進んでいた小さな村グラン・プレ(Grand-Pré)に程近く、その小村と州都その他の州内外の主要な町を結ぶ当時の交通の要所であった。そして、ロパーツはこのアメリカ人作家の手になる詩に関連するイメージを、観光ガイドのみならず自身の詩作品のなかに描かれるマリタイム像の構築にしばしば用いた。

ロパーツの代表作「タントラマー再訪」(“The Tantramar Revisited,” 1886)における『エヴァンジェリン』への言及は、これまでもデズモンド・ペイシー(Desmond Pacey)をはじめ、さまざまなカナダ文学の研究者によって言及されてきた(Jackel 1979: 43; Pacey 1958: 192; Strong 1978: 27)。しかし、知名度という点で前者に劣るソネット風作品「潮」(“Tides”)と「ブロミドン岬」(“Blomidon”)については、ジェームズ・ドイル(James Doyle)によって『エヴァンジェリン』との関連性が指摘されながらも、これまで詳細な研究が進んでいない(Doyle 1979: 78)。本稿ではこの二つの詩を取り上げ、そこに描かれる『エヴァンジェリン』由来のイメージを分析する。この分析の結果、ロパーツはこれらのソネットの中で自らの故郷、すなわち英語圏カナダを描く際に「他者の物語」である『エヴァンジェリン』を用い、さらにはそれをその土地の「神話」

としようと試みたことがわかる。そして、意外なことに、その際に強調されるイメージは決して『エヴァンジェリン』第一部前半を支配する「牧歌的な楽園」のイメージではなく、むしろその後の破壊のイメージを中心とした、「破壊された楽園」のむしろ消極的なイメージであった。

2. ロバーツの「潮」について

1. 「潮」、創作の背景

ロバーツのソネット「潮」は、19世紀末に異なる媒体に繰り返し出版された。このことから、この詩が読者に支持されていたであろう事が推測できる。「潮」の初出は、1885年、ニューヨークの雑誌『センチュリー』(*Century*) 8月号においてである⁴⁾。ロバーツがチャールズ・レナード・ムーア(Charles Leonard Moore)に送った同年6月16日付の手紙は、既にこの詩が『センチュリー』に出版予定であると記載されていることから、「潮」は少なくともそれ以前に書かれ、投稿されたことになる(Roberts 1989: 48)。ロバーツが前年1884年末から1885年初頭にかけて、シカゴの雑誌『カレント』(*Current*)に連載したアカディアの歴史に関するエッセイ「古きアカディアからのこだま」(“Echoes from Old Acadia”)の好評に気を良くしていたことが既に明らかになっているが、このことがロバーツのアカディアへの関心の高まりに何らかの影響を与えたことが想像できる(Adams 1986: 60)。

「潮」はパンクチュエーションと語に若干の編集を加えながら、翌1886年に詩集『イン・ダイヴァース・トーンズ』(*In Divers Tones*)、そして1893年には巻末にパーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley)の生誕100周年に捧げるオードを加えた、詩集『平凡な日の詩、そしてアヴェ!』(*Songs of the Common Day, and Ave!*、以下『平凡な日の詩』と省略)に再収録された。

「潮」と同年、ロバーツの従兄弟ブリス・カーマン(Bliss Carman)による「グラン・プレの干潮」(“Low Tide on Grand Pré”)が米国の『アトランティック・マンスリー』(*The Atlantic Monthly*)に掲載されたこと、またカーマンの処女詩集『グラン・プレの干潮』が出版された1893年にロバーツの『平凡な日の歌』が出版されていることも鑑みて、当時米国において『エヴァンジェリン』に対する関心が高まっていたことが伺える。そして、ロバーツが後にガイドブックを執筆する「グラン・プレ観光」の発展もこの時期に加速する。ウィンザー・アンド・アナポリス鉄道(Windsor and Annapolis Railway)が中産階級以上のアメリカ人をターゲットとしたグラン・プレ観光のために、プルマン方式の豪華な客車を用いた夏季特別列車「ブルーノーズ号」(Bluenose)、「フライング・アカディアン号」(Flying Acadian)の運行を開始するのはこれらの詩の出版の翌年1886年である(Ness 1995: 7)。アメリカ人のアカディアへの関心の高まりの理由については、1882年にロングフェローが他界したことにより、当時アメリカ国内でロングフェローへの関心が高まっていたこと、さらには当時米国では社会問題化していた急速な現代化に伴う精神衰弱への対策として田舎旅行が発展したことなどが考えられるが詳細は別稿に譲る。

ロバーツのアカディアへの関心は、当時彼が主として生活のために書き始めた散文作品のみならず、彼のこの時代に出版された詩作品にもしばしば表出する。『イン・ダイヴァース・トーンズ』には、前述の「タントラマー再訪」も収録されている⁵⁾。さらにロバーツの作品のうち、『エヴァンジェリン』やアカディアに関する言及がみられる作品は決して本節に紹介されたものに限られない。詳しくは本稿第3章ならびに第8頁の図表1を参照いただきたいが、ロバーツは19世紀最後の10年間、ほぼ毎年、このトピックに関する書籍を出版している。

したがって、大都市圏で専門文筆業者として活躍する夢が一度破れたロバーツのウィンザー移転(1885年秋)が、彼が既に持っていたロングフェローへの敬意⁶⁾、移動先におけるアメリカ人向け「エヴァンジェリン観光」開発の進展、そしてロバーツ自身の家計を支える父、大学教授としての立場と複雑に絡み合い、彼の『エヴァンジェリン』およびアカディア関連作品の量産がこの時期に行われたと考えるのが現段階では妥当であろう。

2. ソネット「潮」を読む

(1)形式

ではここからは実際に詩を検証してみたい。「潮」は合計14行からなるソネットである。この詩は、弱強5歩格、前半8行のオクティヴ、後半6行のセステットからなる点は定型的である。一方、この詩の脚韻は ABBC/CBBA DEF/FED であり、英語で書かれるソネットとしてはまれである。しかし、各連の中間を折り返し地点に、それまでの行末韻をさかのぼり押韻していくこの押韻形式は、あたかもこの詩の主題である、定期的に満ち、また引いてゆく自然の「潮」を思い起こさせる適切な表現形式である点を指摘したい。さらに形而上詩人やモダニスト詩人のように意図的なものか是不明であるが、この詩が視覚的に潮の満ち引きを思わせる波形に処理されている点も興味深い。以下に、一般的に信頼度が高いとされるカナダ文学者 W. J. キース (W. J. Keith) の編集になる選集 (*Selected Poetry and Critical Prose*) 第59頁から、原文のまま引用するので行頭及び行末に注目されたい。以下の通り波型に行頭と行末がまとめられていることがと考えるのは筆者だけであろうか。

Through the still dusk how sighs the ebb-tide out,
Reluctant for the reed-beds! Down the sands
It washes. Hark! Beyond the wan gray strand's
Low limits how the winding channels grieve[,]
Aware the evasive waters soon will leave
Them void amid the waste of desolate lands,
Where shadowless to the sky the marsh expands,

And the noon-heats must scar them, and the drought.

Yet soon for them the solacing tide returns

To quench their thirst of longing. Ah, not so

Works the stern law oar tides of life obey!

Ebbing in the night-watches swift away,

Scarce known ere fled forever is the flow;

And in parched channel still the shrunk stream mourns. (Emphases added)

なお、上の引用のうち、1893年に『平凡な日の詩』に再収録された際に、語が変更された箇所には下線を引いた⁷⁾。なお、特に本稿においては、ロイヤリストの子孫であるロバーツの持つフランス系アカディア人観に注目しながらこの詩を解釈するため、上記第11行目の“oar”は、『平凡な日の詩』において改定された詩にあるとおり、“our”として解釈する。

(2)内容

「潮」を支配する全体的雰囲気は暗い。詩中、擬人化された自然現象「潮」、「水路」、「日射」などと共に用いられる動詞だけを見てもそれは分かる。特に詩の前半8行に、自然現象を擬人化する動詞は多く登場する。例えば、前半には、「ため息をつく」(“sigh”)、「悲嘆する」(“grieve”)、「傷つける」(“scar”)などの動詞が使われる。加えて、中盤は、「渇きを癒す」(“quench”)などが使われ少し明るくなるもの、最後の二行ではやはり「逃れる」(“fled”)、「嘆く」(“mourn”)、が用いられ、不穏な調子へと戻る。修飾語にしても同様にネガティブのものが多い。詩の前半には、「いやいや」(“reluctant”)、「青白い」(“wan”)、「灰色の」(“grey”)、「空虚な」(“void”)、「荒涼とした」(“desolate”)、そして、後半には「厳格な」(“stern”)、「縮んだ」(“shrunk”)、「からからに乾いた」(“parched”)などが見られる。

ソネット全体の悲しい調子の理由は後半6行が説明している。時に引き上げ、その土地を乾いた不毛の地としても、やがて一定の時を経て戻り、その土地を癒す潮の干満という毎日繰り返される「自然の法」は、第2連目、特に第10行目後半から描かれる、必ずしもその場を去ったものが、戻り来ることを許されるわけではない厳しい「我々の人生が従うべき法」と比較されているからである。1886年版の第11行目の“the stern law oar tides of life obey”を「我々の人生が従うべき法」と解釈することについては異論があるかもしれないが、先に述べたとおり、“oar”という語は後に『平凡な日の詩』(1893)に出版される際には“our”に書き換えられていることから、このように解釈することは可能であろう(Roberts 1893: 32)。続く12行目は、実際にこの「我々の人生が従うべき法」のために、潮とは異なり「永遠に戻ってこない流れ」(“ere fled forever is the flow”)があることを示唆している。この「流れ/満潮」(the “flow”)はひとつには「水

の動き」を意味しているのであろうが、詩の舞台が干満の差が世界一を誇るロバーツの故郷、タントラマー地域とアナポリス・ヴァレーが共有するファンディ湾岸であろうこと、また、『平凡な日の歌』では、次章にて取り上げる『エヴァンジェリン』への言及があからさまなソネット「プロミドン岬」の近くに配置されていることから⁸⁾、この流れはファンディ湾岸の故郷から「去る」(“fled”)ことを強いられたアカディア人の「流れ」と考えるのが自然であろう。ここでまた第 11 行目を“our”を用いて理解することが重要となる。というのは、ロバーツは再び戻ることの出来なかった「アカディア人が従ったその法」を「我々の」ものとするにより、自らを「他者」であるフランス系のアカディア人に対して同化的心情を持つ者として表現することが可能になるからである。

先行テキストであるロングフェローの『エヴァンジェリン』においても、グラン・プレ付近の潮の干満はしばしば描かれている。特にこの詩の中でも繰り返される潮の干満、とくに引き潮(ebb-tide, ebbing)の様子は、『エヴァンジェリン』第一部終末において、前日にイギリス軍により海岸に集められ、そこで一夜を明かしたアカディア人は、夜明けに満ちた潮が、再び後退してゆくのに合わせて船出する点からも重要な意味を持つ。ここで比較のために、『エヴァンジェリン』第 1 部の最後の 5 行を引用する。

'T was the returning tide, that afar from the waste of the ocean,
With the first dawn of the day, came heaving and hurrying landward.
Then recommenced once more the stir and noise of embarking;
And with the ebb of the tide the ships sailed out of the harbor,
Leaving behind them the dead on the shore, and the village in ruins. (ll.661-65)

上の引用部には、干満を繰り返す潮が干潮の力により海岸から押し出されるとき、船が港付近で亡くなったエヴァンジェリンの父、そしてイギリス軍により破壊された村を後にして出航する様子がドラマティックに描かれている。

このように「潮」は、潮という題材を用い形式的にも内容的にもロレイン・マクミュレン(Lorraine McMullen)が、ロバーツの詩の特徴として挙げる循環構造と対照法を体現するロバーツらしい秀作でもある(207)。しかし、それ以上にロイヤリストの子孫であるロバーツが『エヴァンジェリン』で詠われた潮という題材を用い「故郷」を歌う際に、いわば「アカディア人の敵」でありながらも自らを「アカディア人の神話」に同化するかのような心情を示した点は、この地域で盛んに行われる英語系住民による「グラン・プレ観光」の開発を理解するうえでも非常に重要である。

3. ロバーツの「プロミドン岬」について

1. 「プロミドン岬」の背景

「プロミドン岬」は1890年、「潮」を掲載した米国の雑誌『センチュリー』の2月号に掲載された。いずれの作品も同一の米国の一流文芸誌に掲載された点は意味深い。同ソネットの制作時期は1880年代末であろうこと以外明らかになっていないが、出版後短期間にそのソネットと『エヴァンジェリン』の関係が文壇で話題になったことは、同年中にオンタリオ州のジェームス・エルギン・ウェザレル(James Elgin Wetherell)の編集により、トロントのゲージ社(Gage)より出版されたロングフェローの詩選集のカナダ版の註において「プロミドン岬」への言及がなされていることからわかる⁹⁾。

当時キングス・カレッジ在職期間(1885-1895)の半ばにあったロバーツは、職業・家庭生活の繁忙、経済的逼迫、そして、毎夏のようにウィンザーを訪れていたカーマンとその「放浪シリーズ」(Vagabondia poems)の執筆のパートナー¹⁰⁾、米国詩人リチャード・ホヴェイ(Richard Hovey)により特に刺激されたという文筆業者への憧れなどから、その生活に不満を抱えていた(Cogswell 1983: 206)。しかし、晩年ロバーツはこの時代に対して異なった評価を与えている。彼は後にこの10年間を長いキャリアの中で「最も豊か」かつ、彼自身が「最も成長した」期間ととらえ、散文、詩ともに最高傑作がうまれた時代であると手紙に書き残している。また同じ手紙から、この時期に得た思い出やインスピレーションが、ロバーツの後年の創作活動に影響を与え続けこともわかる¹¹⁾。

キングス・カレッジ在職期間中、ロバーツは大学に程近い教員住宅キングスクロフト(Kingscroft)で生活を送った。1858年ノヴァ・スコシア鉄道(Nova Scotia Railway)によりいち早く州都ハリファックスと結ばれたウィンザーは、蒸気船そして鉄道により隣州、そして米国東海岸の都市と連結されるのみならず、観光地となったグラン・プレを擁す穀倉地帯アナポリス・ヴァレーとも結ばれる交通の要所であった。特に、「プロミドン岬」(1890)出版後の約10年間、ロバーツの『エヴァンジェリン』、ないしはアカディアに関する書籍の出版がピークに達することは、この時期のロバーツの創作背景となんらかの影響関係があるに違いない。詳しくは次ページの図表1を参照されたいが、当時の関連出版物を列举すると、1890年のフランス語系作家フィリップ・オーベル・ドゥ・ガスペ(Phillipe Aubert de Gaspé)によるフランス統治下を舞台とした歴史小説『古き日のカナダ人』(*Canadians of Old*)の翻訳に始まり、「エヴァンジェリン詣」のための広告が掲載された翌年出版の『カナディアン・ガイドブック』(*Canadian Guidebook*)の執筆、アカディアの歴史上重要な古戦場ボセジュール砦(Fort-Beauséjour)を舞台にした子供向け歴史小説『ボセジュールからの急襲、その他』(*The Raid from Beauséjour, and How Carter Boys Lifted the Mortgage*, 1894)などがあげられる。そしてロバーツはついに大学を退職する1895年には地元鉄道会社から出版された「エヴァンジェリン詣」のための旅行者向けガイドブック『エ

カナダ、コンフェデレーション詩人とマリタイムの神話 (荒木)

ヴァンジェリンの地とそなたへの入り口』(*The Land of Evangeline and the Gateways Thither*)を執筆するに至る。これに加えて、ロバーツがジェームス・ハネイ(James Hannay)著『アカディアの歴史』(*History of Acadia*)に影響された『カナダ史』(*A History of Canada*)を歴史教科書にすることを念頭に執筆していたのも 1893 年前後である (Adams 1986: 60)。『カナダ史』は歴史教科書として使用されることはなかったが、後に 1897 年ボストンの出版社により日の目を見ることとなる。

このような一連の流れの中から考えると、「プロミドン岬」はロバーツの「アカディア熱」が沸点に達する 19 世紀末の 10 年間の始まりを告げる重要な詩作品として位置づけられる。

(図表 1) ロバーツのエヴァンジェリン, アカディア関連の書籍(雑誌を除く、1885 - 1900)

年次	書籍名	出版地	出版社
1886	<i>In Divers Tones</i>	Boston	Lothrop
1890	<i>Canadians of Old</i> (翻訳)	Toronto (再版, 1974)	McClelland and Stewart
1891	<i>The Canadian-Guide Book</i>	New York	Appleton
1893	<i>Songs of the Common Day, and Ave!</i>	London	Longmans
1894	<i>The Raid from Beauséjour, and How Carter Boys Lifted the Mortgage</i>	New York	Hunt and Eaton
1895	<i>The Land of Evangeline and the Gateways Thither</i>	Kentville, NS	Dominion Atlantic Railways
1895	<i>Reube Dare's Shad Boat</i>	New York	Hunter and Eaton
1896	<i>The Forge in the Forest</i>	Boston	Lamson, Wolffe
1897	<i>A History of Canada</i>	Boston	Lamson, Wolffe
1898	<i>A Sister to Evangeline</i>	Boston	Lamson, Wolffe
1900	<i>By the Marshes of Minas</i>	Boston	Silver, Burdette

2. 「プロミドン岬」を読む

(1) 形式

「プロミドン岬」は押韻方法、韻律、いずれも典型的な 14 行詩、ソネットである。作品は第 1-8 行目までの前半と、第 9 行移行の後半に分かれている。また前半部はさらに 4 行目を境に前後に分かれる。リズムは弱強 5 歩、脚韻は ABAB CDCD/ EFEF GG と押韻されており、典型的なイギリス風ソネットといえよう。

文学的約束事に忠実な定型のリズムは、10行目に登場する英軍のものと思われる船に乗っているであろう兵隊のマーチをイメージさせる。また、破裂音の頭韻を多用した冒頭の行は、描かれる荒々しい風景、そして内容とあいまって、後に表される災禍を示唆する。

(2) 内容

『エヴァンジェリン』の中にも登場する岬の名前「プロミドン」を冠に持つことから明白であるが、この詩はロングフェローおよびその作品『エヴァンジェリン』を強く意識した内容になっている。まず、ここでは考察を容易に運ぶため、ここに W. J. キースの編集による『選集』第 109 頁より「プロミドン岬」の該当部分(11.5-8)を引用する。

This is that black rock bastion, based in surge,
 Pregnant with agate and with amethyst,
 Whose foot the tides of storied Minas scourge,
 Whose top austere withdraws into its mist.
 This is that ancient cape of tears and storm,
 Whose towering front inviolable frowns
 O'er vales Evangeline and love keep warm—
 Whose fame thy song, O tender singer, crowns.
 Yonder, across these reeling fields of foam,
 Came the sad threat of the avenging ships.
 What profit now to know if just the doom,
 Though harsh! The streaming eyes, the praying lips,
 The shadow of inextinguishable pain,
 The poet's deathless music—these remain!

上の引用から分かるとおり、前章でとりあげた「潮」においても、モチーフとして用いられた潮が擬人化されていたのと同様に、このソネットの中でプロミドン岬は擬人化されている。『エヴァンジェリン』第一部第一章の冒頭(11.20-32)は、実在する地名や地理的特徴を用いながら、詩の舞台となる「風景」を定義する。その時マイナス湾(1.20)、グラン・プレ村(1.21)、そしてその北にある大西洋(1.30)とともに、ランドマークとして言及されるプロミドン岬(1.29)は、ロバーツの旅行ガイド本を出版したドミニオン・アトランティック鉄道(Dominion Atlantic Railway)の機関車(第32号)の車両名にも用いられたこともあり、少なくとも『エヴァンジェリン』の読者には良く知られていたものと思われる(Ness 1988: 6)。

「プロミドン岬」は第一連冒頭で早くもその詩と『エヴァンジェリン』の関連性を確立する。

ソネットの歌いだし “This is that” (l.1)は、『エヴァンジェリン』の歌いだし “This is the” (l.1)に類似しているのに加え、前者の全体として弱強の調子の詩中に、変則的に『エヴァンジェリン』と同じ強弱弱調を作り出す。また、「プロミドン岬」においては、指示代名詞 “that” の使用により、明確にそれが読者が共有するであろう指示対象、すなわち先行テキストである『エヴァンジェリン』を持つことが示されている。先に言及したマイナス湾についても、プロミドン岬と思しき「黒い岩の砦」(l.1)の足もとの潮は「物語化されたマイナスの災禍」[storied Minas scourge (l.3)]というフレーズによって修飾されている。ここで言う「物語」が、『エヴァンジェリン』であることは言うまでもない。さらに続く第4行目にはそのそびえたつ「砦」の頂上が霞(mist)の中にあることが記されているが[Whose top austere withdraws into its mist (l.4)]、この描写は、まさに『エヴァンジェリン』に描かれた上空に海からの霧をいただく岬の描写 - 「プロミドン岬、そして古き森そびえたり、またその山々の上空には海の霧、偉大なる大西洋からの霧、天蓋を張りけり」[“Blomidon rose, and the forests old, and aloft on the mountains/ Sea-fogs pitched their tents, and mists from the mighty Atlantic” (l.29-30)] - を思い起こさせる。

次に第一連後半に議論を移す。本部分には特に『エヴァンジェリン』へのあからさまな言及が見られるため重要である。該当部分歌いだしにおいて、ロバーツはこの岬を「アカディア人の追放」(1755)の舞台として位置づけるために、それを示唆する「涙と嵐」という修飾を与えている(l.5)。同行でさらに気になる点は、この岬にロバーツが「太古の」(ancient)という形容詞を与えている点である。『エヴァンジェリン』においても、19世紀半ばロングフェローは発生から一世紀を経ないこの事件を「過去のこと」として非政治化をするがごとく、「太古の森」[forest primeval (l.1, l. 1390)]というフレーズによって詩をフレーミングしていたが、「プロミドン岬」においても、同様の操作が行われていることがうかがい知れる。アカディア人が追われた後に沿海州に住み着いたイギリス系ロイヤリストの子孫として、事件の現場に居住したロバーツがこの地域について詠う時、この事件を「過去のこと」とするのは、皮肉であるが当然かもしれない。

そして、一連最後の2行(II.7-8)には、あたかもギリシア・ラテン神話の登場人物とその作者が詩中に取り上げられるように、エヴァンジェリンとその恋人(Gabriel)への言及が見られる。しかし圧巻は、そのみならず、その地域の名声を「詩」によって報いた「優しき詩人」ロングフェロー (l.7)を讃えることであろう。

ロバーツは文学の役割はある「制度」(institution)を永久化し、国家の一体性が依って立つ「神話」(mythos)と「精神」(ethos)を作り出すことであると考えていた(Cogswell 189, 195)。このことは、ロバーツの「プロミドン岬」におけるこの行為が、英国国教会の司祭(Canon)とニュー・イングランドから移住したロイヤリストの子孫である母の息子であり、ウィンザーの大学教授であった「制度」の権化であるロバーツが、ギリシャ古典の叙事詩ように強弱弱調6歩格でうたわれる『エヴァンジェリン』とそれが体現する価値観を、この地域の「擬似古典」ないしは

「擬似神話」として賛美し、自らの作品中にもちいることにより「神話」として固定化しようとする意図をもっていたことを示唆する。カナダ文学者ジョージ・ウッドコック(George Woodcock)は、コンフェデレーション詩人は、カナダの先行世代の詩人から影響を断ち切り、そのモデルを主としてイギリスに求めたと指摘する一方、ロングフェローは彼らに影響を与えたほぼ唯一の新大陸の詩人であると指摘する(Woodcock 1983: 13)。とはいえ、親英派のカナダ・ナショナリストとして知られるロバーツが自らの故郷を韻文で詠う際に、この地に足を踏み込んだことがないうえに、ニュー・イングランドの古株らしく、アメリカの独立を支持するゆえに時に反英的な態度を示したアメリカ人の「創造した」故郷のイメージを使うことに対して、目立った葛藤の痕跡を詩中に残していないことは、今日のパースペクティブから見て意外であると同時に皮肉である。しかし既にチャールズ・スコビー(Charles H. H. Scobie)らは、ロバーツは後にアカディアを散文において描く際には、ロングフェローのイギリス軍批判や、『エヴァンジェリン』に描かれた悲観的な英仏関係を「是正」するような形で使用していたことは既に指摘している(Scobie 2008: 23)¹²⁾。このことから、ロバーツがこの時期の詩中において同様の行為を行わなかったことは、アメリカの読者を強く意識してのことと考えられる。

「プロミドン岬」の『エヴァンジェリン』への依拠は、セステットにいたっても続く。詩の後半では英軍によるアカディアの破壊が「示唆」されている。筆者があくまで「示唆」という表現にこだわるのは、セステットには、実際の破壊の様子はまったく描かれておらず、その災禍の全てが「悲運」[the doom (l.11)]の一言で一括されているからである。しかし、ロバーツは『エヴァンジェリン』に登場した「イギリス船」[“English ship” (l. 237)]を喚起する「報復の船群」[“the avenging ships” (l.10)]をここで登場させ、このソネットを1000行を越えるエピック風の世界物語詩と結びつけることにより、その破壊行為を読者に十分に伝えることに成功している。興味深いのは、ロバーツ、ロングフェローという二人の英語を母国語とする WASP(White Anglo Saxon Protestant)作家は、ともに詩中自らが描くフランス系住民アカディア人の歴史を、自らの都合の良いように操作している点である。合衆国人ロングフェローは、その船の出自を単に“English”とすることにより、それが実際には彼の故郷のニュー・イングランドから出向いたという史実、すなわち「アメリカ人」のアカディア人に対する残虐行為への参加に対する読者の注目をそらした。一方前述の通り、親英的カナダ・ナショナリストであるロバーツは、ソネット中この船の出自について全く明示せずに、船の船籍を想像する行為をまったく読者の文学的連想にゆだねることにより、英軍の破壊行為を隠蔽した。

そして「プロミドン岬」は、「これらとはどまる」(l.14)と結ばれる。この表現は今も、そしておそらく未来にも残るもの、すなわち、「涙あふれる目」(l.12)、「祈るような唇」(l.12)、「拭い去ることのできない苦痛の影」(l.13)、そして何よりも「その詩人の死ぬことのない音楽」(l.14)とは対照的に、詩の中に明示されてはいないプロミドン岬近辺からなくなったもの 追放されアナポリス・ヴァレーに戻ることをゆるされなかったアカディア人の存在を示唆する。

このように、一見、コンフェデレーション作家によくみられる平均的な「風景」の詩とも思われる前半部をもつ「プロミドン岬」において、ロバーツは『エヴァンジェリン』という先行テキストを有効に再機能させることにより、わずか14行でかつてその岬付近で起こった「アカディア人の追放」という歴史をも彼自身の見地から詠うことに成功した。「プロミドン岬」が「風景の詩」であることは疑いのない事実である。しかし、この詩が平凡な風景詩に終わらない理由は次の通りである。1897年、ニューヨークの『フォーラム』(Forum)誌12月号に掲載された「自然の詩歌」(“Poetry of Nature”)において、ロバーツは、彼の考える「自然の詩」(nature-poetry)とは、単なる韻文による「風景描写」ではなく、外的な自然と人間の深い心情との関係の表出であると論じている(Roberts 1989: 281)。筆者は、「プロミドン岬」はこのロバーツの「自然の詩」に関する理論が、ソネット形式で実践された好例であることと同時に、それがロングフェローへのオマージュとしても機能していることを指摘して本章を閉じたい。

4. ソネットにみる『エヴァンジェリン』由来の「アカディア」イメージの特徴

前2章では、ロバーツが1880年代に米国の雑誌に発表した『エヴァンジェリン』に言及するソネット2作品をとりあげ、そこに用いられる『エヴァンジェリン』に関係するイメージをそれぞれ検証した。本章では二つの詩に現れる『エヴァンジェリン』由来のイメージの特徴を考察したい。ふたつの詩を比較すると、「潮」(1885)が『エヴァンジェリン』との関係を後半部にわずかに示唆するにとどまらないのに対して、5年後に発表された「プロミドン岬」(1890)は、より大胆に『エヴァンジェリン』やその作者ロングフェローに言及しているという相違がみられる。このことは、ロバーツの『エヴァンジェリン』というテーマへの関心の発展を考えるうえで非常に重要である。しかし、いずれの詩においても、そこに現れるマリタイムの風景が非常にネガティブなイメージを与えられている点で共通している。

二つの詩を共に『エヴァンジェリン』に繋ぐイメージは、「海」のイメージである。いずれのソネットも、ロングフェローの詩の舞台であると同時に、ファンディ湾岸の「自然」が作り出した、「潮」と「岬」が主題になっている。そしてこれらの「自然」は詩の中では擬人化されている。しかし、自然の擬人化の一方で、いずれの詩の中においても、自然を人間と対比する様子をうかがうことができる。「海」はどちらの詩でもアカディア人のその後の「追放」と「流浪」につながる場所(「潮」11-12行目、「プロミドン岬」10行目)として描かれているが、この「場」において、人と自然が暗示するものは大きく異なる。ファンディ湾岸の「自然」は、繰り返すもの(潮)、そして太古から変わらず存在するもの(岬)として「永続性」をあらわす。対照的に、人間の営みは、その地を追われて戻ることがなかったエヴァンジェリンらアカディア人に代表されるとおり、永続性を持たないものとして描かれている。ロバーツのソネットに表れる『エヴァンジェリン』由来のイメージが、「暗い」ものである主たる原因はここにある。

これらのソネットに表れる海のイメージを中心としたアカディアはいずれも、『エヴァンジェリン』の第一部(特に最初の234行)が強調した平和な田園風景を中心とする「ピクチャレスク」(picturesque)なアカディアではない¹³⁾。ピクチャレスクにつながりえる要素は、わずかに「プロミドン岬」に言及される、エヴァンジェリンとガブリエルが生活した谷(1.7)であるが、この谷とて峻険な岬がのしかかっているようなイメージで描かれている(1.6)。むしろ、「プロミドン岬」に見られる荒々しい断崖や、「潮」にみられる海水が干上がり地割れする低湿地などは、荒々しく畏怖を感じさせる「サブライム」(sublime)なイメージを与えられているといえよう。

このように、二つの詩に表れる『エヴァンジェリン』由来のマリタイム・イメージが、ロングフェローが美化した風光明媚でポジティブな農村という側面を強調するのではなく、どこか崇高でありながらも、明らかにネガティブなイメージを付加された沿岸地域であったことは、彼が同時期にこの地域への「観光」を促進するためのガイドブックを書いていたことから考えると意外である。

ロバーツが詩作品とガイドブックに表わすマリタイムのイメージに大きな違いは見られるのだろうか。これまでカナダ文学者たちはロバーツが韻文と散文という表現手段を市場の要求によって使い分けており、ロバーツの作品のなかには形式が交換可能な場合があることを指摘している(Cogswell 1983: 222-23; Gibbs 1977: 61; Keith 1969: 116-19)。このソネットとガイドブックの関係は、実は後者のケースにあてはまるのだろうか。本稿の目的はそこにはないが、この点について一歩踏み込んだ議論を行うためには、今後ロバーツがこれらの詩を出版した時期、すなわち、1891年と1895年に執筆した旅行ガイドの中に現れる『エヴァンジェリン』由来のマリタイム・イメージを考察し、さらに本稿において検討されたロバーツの詩作品の中に現れるそのイメージと比較研究する必要がある。

5. おわりに

本稿は1867年の連邦結成以後のカナダを代表する作家、チャールズ・G・D・ロバーツが後に専業作家として米国そしてヨーロッパに移住する以前、1885年から1890年に米国雑誌に発表し、ともに後に詩集『平凡な日の詩』に収録した作品のうち、半世紀近く前に同地を詠った米国詩人ロングフェローの物語詩『エヴァンジェリン』(1847)との関係がすでに指摘されているソネットを取り上げ、そこに見られる『エヴァンジェリン』関連のイメージを検討した。この考察からロバーツは『エヴァンジェリン』を自らの故郷マリタイムの風景と結び付け、文学空間上に、明確なカナダ人意識をもったカナダ人により描かれたことのなかった彼の「故郷」を「創造」したことがわかる。しかし、このときロバーツがその「原風景」をロングフェローにより作られた詩としたことは重要である。特に「プロミドン岬」の検証が顕著に示すように、ロバーツは作品中に『エヴァンジェリン』由来のイメージを歌いこむその行為を通して、「アメ

リカ人」が創造した自らの故郷についての叙事風の詩を、あたかもこの地方とそのコミュニティの創造にかかわるもっとも著名な「物語」ないしは「ミュトス」として位置付けているようにすら思われる。

この時期に、『エヴァンジェリン』をこの地域の「神話」として祭り上げようとしていたのは、英語系詩人のロバーツだけではない。19世紀後半から末にかけて、追放先からニュー・ブランズウィック州を中心とするマリタイムに帰還して一世紀を経ようとしていたアカディア人の中では、民族意識が高まっていた。しかし、アカディア人は当時民族を結びつける「文学作品」をもたなかったため、その文化的指導者たちが民族意識の鼓舞のため、『エヴァンジェリン』の仏語訳を用いていたことについては、大矢タカヤス、市川慎一など、近年日本の研究者も注目している。このようにほぼ同じ時期に、カナダの沿海州という比較的限られた地域において、二つの異なるグループが異なる意図の元で、「他者」によって作られた『エヴァンジェリン』の神話化を目指していたことは興味深い事実といえよう。ただ、ロバーツら英語系カナダ人詩人が『エヴァンジェリン』を彼らの神話とすることは、たとえそれが「民族」の神話としてではなく、その「土地」の神話としてであっても、アカディア人がそうする以上に困難であるはずである。なぜなら、それが「アメリカ人という他者」により詠われた「アカディア人という他者」と彼らのかつての居住地「旧アカディア」であり、ロバーツがソネットの中で嘆いた「アカディア」の破壊を敢行し、その後沿海州に入植したグループが、ほかでもない当時の英語系カナダ人だからである。しかしながら、ロバーツがこのソネットにおいて、そして、地域の英語系カナダ人がグラン・プレの観光地化のために容易にそれをしてのけたことは、当時の英語系マリタイム住民の自らと「アメリカ人」を差別化する意識の弱さ、そしてアカディア人ならびにその文化に対するセンシティヴィティの欠落を暗に意味する。

最後に、マリタイムにおける『エヴァンジェリン』の「神話化」を包括的に論じるためには、本稿が行ったロバーツの詩作品をはじめとする文学作品を介した『エヴァンジェリン』の神話化に加えて、第2章でも示唆した同地域でこの時期に行われていた観光開発についても考察する必要がある点を確認して本稿を終えたい。

<注>

- 1) ウィリアム・ライトホール(William Douw Lighthall)により1922年にはじめて使用された「コンフェデレーション詩人」という用語は(Bentley 2004: 4)、ニュー・ブランズウィック州出身の文芸批評家、マルコム・ロス(Malcolm Ross, 1911-2002)により定着させられたとされる(Toye 2001: 86)。ロスは、1958年、カナダ文学のキャノン作りをめざしたマクレランド・アンド・ステュアート社(McClelland and Stewart)のニュー・カナディアン・ライブラリー・シリーズ(New Canadian Library Series)の初代編集者としても知られる。1960年にロスがシリーズ第一弾として、ロバーツ、ブリス・カーマン(Bliss Carman)、アーチバルド・ランプマン(Archibald Lampman)、ダンカン・キャンベル・スコット(Duncan Campbell Scott)をひとつのカテゴリーとし、彼らの詩を『コンフェデレーションの詩人たち』(*Poets of the Confederation*)としてアンソロジー化したことはカナダ文学史上きわめて重要といえよう。この書籍のイントロダクションの冒頭でその一群の詩人を指し示すために用いられたのが、「コンフェデレーション詩人」とい

- う言葉であった。同書がシリーズの第一弾であったことから、これらの詩人が、当時の「国民文学」の創造を目指していたカナダの批評家にとって非常に重要なものであったことが分かる。ロスによる『コンフェデレーションの詩人たち』のイントロダクションを参照されたい(Ross 1960: vii-xiii)。
- 2) ローレル・ブーン(Laurel Boone)の編集によるロバーツ書簡集、ジョン・コールドウェル・アダムズ(John Coldwell Adams)によるロバーツ伝記、ミュリエル・ミラー(Muriel Miller)によるカーマンの伝記、そして H. ピアソン・ガンディ(H. Pearson Gundy)の編集によるカーマン書簡集を参照のこと。
 - 3) 現在はキングス・カレッジ大学はノヴァ・スコシア州都ハリファックスにある。
 - 4) 『月刊スクリブナー』(Scribner's Monthly)の後続誌。この雑誌はその他にも多くのロバーツの詩を掲載している。
 - 5) 同詩は当初「ウェストモアランド再訪」("Westmoreland Revisited")として1883年、トロントの雑誌『ウィーク』(The Week)上に掲載された。
 - 6) ロバーツのロングフェローへの敬意を最も端的に示すのは、ハーバード大学図書館に今も残るロバーツが自らの処女詩集をロングフェローへと贈った際に添えた手紙であろう。ロバーツのロングフェローへの手紙(1880)を参照のこと。
 - 7) キースが編集の際に底本として使ったテキストは明記されていないが、7行目の行末にコンマがない点を除けば、1886年にボストンで出版された版と全く同じであるので、このヴァージョンと思われる。また、1893年に『平凡な日の詩』に再収録される際に、語句自体が変更された部分があるため、その箇所には下線を引いた。第13行目の“ere”も後に“are”へと変更されている。キース編集による選集に加えて、以下のテキストを参考にした。Charles G. D. Roberts, "Tides," *In Divers Tones* (1886; Whitefish: Kessinger, 2004) 58-59. Charles G. D. Roberts, "Tides," *Songs of the Common Day and Eve!* (Toronto: Briggs, 1893) 32.
 - 8) 「潮」と「プロミドン岬」の間には、「プロミドン岬」と同年、カーマンがその編集に携わったニューヨークの『インディペンデント』(Independent)誌3月号に出版された「夜空」("The Night Sky")というソネットが挟まれている。See Roberts, *Songs* 30-32.
 - 9) Henry Wadsworth Longfellow, *Longfellow's Evangeline, Tales of a Wayside Inn, and Selections from Minor Poems*, ed. James Elgin Wetherell (Toronto: Gage, 1890). ロバーツのトロントの出版業者 W. J. ゲージ(W. J. Gage)と関係者にあてた1890年末に書かれた手紙を参照のこと(Roberts 1898: 128).
 - 10) 19世紀最後の10年間に、カーマンがホヴェイと連名で出版した自然崇拜とボヘミアにズムにあふれる作品群、*Songs from Vagabondia* (1894)、*More Songs from Vagabondia* (1896)、*Last Songs from Vagabondia* (1900)をさす。二人の放浪体験をもとに書かれた詩が多い。
 - 11) Charles G. D. Roberts, letter to the editor of the *King's College Record*, 17 Apr. 1939, University of King's College., Halifax. 『書簡集』の编者、ブーンは、宛名がフルネームで書かれていない、この手紙が同誌の編集に携わったアラン・ウェブスター・マクドナルド(Alan Webster Macdonald)であろうことを指摘している(Roberts 1989: 565).
 - 12) 後に20世紀の他のノヴァ・スコシアの小説家も同じ行動に出る。詳しくはイアン・マッケイ(Ian McKay)とウィリアム・オーウェン(William Owen)らの研究を参照いただきたい。また、ロングフェローの詩に表れるアメリカ人的歴史観については M.ブルック・テイラー(M. Brook Taylor)の論文を参照のこと。
 - 13) 『エヴァンジェリン』中の風景をピクチャレスクとみなす筆者の主張は、『エヴァンジェリン』をヨーロッパ文学に登場する田園風景と比較し、峻険な山の風景をときに織り込んだ前者をサブライムであるにとらえるフランクとマーズ(Armin Paul Frank and Christel-Maria Maas)の意見とは異なる(Frank and Maas 2005: 39-42)。

<引用・参考文献>

一次資料

Roberts, Charles G. D. *Selected Poetry and Critical Prose*. Ed. W. J. Keith. Toronto: U of Toronto P, 1974.
 Longfellow, H. W. *Poems and Other Writings*. Ed. J. D. McClatchy. New York: The Library of America, 2000.

二次資料

Adams, John. Coldwell. *Sir Charles God Damn: The Life of Sir Charles G.D. Roberts*. Toronto: U of Toronto

カナダ、コンフェデレーション詩人とマリタイムの神話 (荒木)

- P, 1986.
- Bentley, D. M. R. *The Confederation Group of Canadian Poets, 1880-1897*. Toronto: U of Toronto P, 2004.
- Carman, Bliss. *Letters of Bliss Carman*. Ed. H. Pearson Gundy. Montreal and Kingston; McGill-Queen's UP, 1981.
- . "Low Tide on Grand Pré." *The Atlantic Monthly* 59 March 1887: 313-14.
- . *Low Tide on Grand Pré*. New York: C.L. Webster and Co., 1893.
- Carman, Bliss, and Richard Hovey. *Last Songs from Vagabondia*. Boston: Small and Maynard, 1900.
- . *More Songs from Vagabondia*. Boston: Copeland and Day, 1896.
- . *Songs from Vagabondia*. Boston: Copeland and Day, 1894.
- Cogswell, Fred. "Charles G. D. Roberts." Woodcock 187-232. Downsvew: ECW, 1983.
- Doyle, James. "Canadian Poetry and American Magazines, 1885-1905." *Canadian Poetry* 5 (Fall/ Winter 1979): 73-82.
- Gaspé, Phillipe Aubert de. *The Canadians of Old*. Trans. Charles G. D. Roberts. New York: Appleton, 1891.
- Gibbs, Robert. "Voice and Persona in Carman and Roberts." *The Marco Polo Papers: One*. Ed. Kenneth MacKinnon. Halifax: Atlantic Canada Institute, 1977. 56-67.
- Frank, Armin Paul, and Chirstel-Maria Maas. *Transnational Longfellow: A Project of American National Poetry*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2005.
- 市川慎一 『アカディアンの過去と現在 知られざるフランス語系カナダ人』彩流社, 2007.
- Jackel, David. "Roberts' "Tantramar Revisited": Another View." *Canadian Poetry: Studies, Documents, Reviews* 5 (Fall/Winter 1979): 41-56.
- Keith, W. J. *Charles G. D. Roberts*. Toronto: Copp, Clark, 1969.
- Lampman, Archibald. "Two Canadian Poets." *University of Toronto Quarterly* 13 (July 1994): 406-23.
- Longfellow, Henry Wadsworth. *Longfellow's Evangeline, Tales of a Wayside Inn, and Selections from Minor Poem*. Ed. James Elgin Wetherell. Toronto: Gage, 1890.
- McKay, Ian. *The Quest of the Folk: Antimodernism and Cultural Selection in Twenty-Century Nova Scotia*. Montreal and Kingston: McGill-Queen's UP, 1994.
- McMullen, Lorraine. "'The Poetry of Earth': A Note on Roberts' Sonnets." *Studies in Canadian Literature* 1 (Summer 1976): 247-51.
- Miller, Muriel. *Bliss Carman: Quest & Revolt*. St. John's: Jespersion, 1985.
- Ness, Gary W. *Canadian Pacific's Dominion Atlantic Railways*. 2 vols. Calgary: B.R.M.N.A, 1988-95.
- Owen, William. "Roberts, Parker, and the Uses of History." *The Sir Charles G. D. Roberts Symposium*. Ed. Glenn Clever. Sackville: U of Ottawa P, 1984. 117-25.
- 大矢タカヤス, H. W. ロングフェロー 『地図から消えた国、アカディアの記憶』書肆心水, 2008.
- Pacey, Desmond. *Ten Canadian Poets*. Toronto: Ryerson, 1958.

- Roberts, Charles G. D. "Blomidon." *Century* Feb. 1890: 508.
- . *By the Marshes of Minas*. Boston: Silver, Burdett, 1900.
- . *The Canadian Guide Book*. New York: Appleton, 1891.
- . *The Collected Letters of Charles G. D. Roberts*. Ed. Laurel Boone. Fredericton: Goose Lane, 1989.
- . *In Divers Tones*. Boston, D. Lothrop, 1886.
- . *The Forge in the Forest*. Boston: Lamson, Wliffe, 1896.
- . *A History of Canada*. Boston: Lamson, Wolfe, 1897.
- . *The Land of Evangeline and the Gateways Thither*. Kentville: Dominion Atlantic Railway, 1985.
- . Letter to H. W. Longfellow. 4 Nov. 1880. Houton Library, Harvard University, Cambridge, MA.
- . Letter to the Editor of the *King's College Record*. 17 Apr. 1939. University of King's College, Halifax.
- . *Orion and Other Poems*. Philadelphia: Lippincott, 1880.
- . *The Raid from Beauséjour, and How the Carter Boys Lifted the Mortgage: Two Stories from Acadie*.
New York: Hunt and Eaton, 1894.
- . *Reube Dare's Shad Boat: A Tale of the Tide Country*. New York: Hunter and Eaton, 1895.
- . Selected Poetry and Critical Prose. Ed. W. J. Keith. Toronto: U of Toronto P, 1974.
- . *A Sister to Evangeline*. Boston: Lamson, Wolfe, 1896.
- . *Songs of the Common Day, and Ave!* Toronto: W. Briggs, 1893.
- . "Tides." *Century* August 1885: 568.
- . "Westmoreland Revisited." *The Week*. 20 Dec. 1883. 38.
- Roberts, Theodore, and Arthur L. Tunnell. *Standard Dictionary of Canadian Biography*. Vol.1. Toronto:
Trans-Canada, 1934.
- Ross, Malcolm, ed. *Poets of the Confederation*. Toronto: McClelland and Stewart, 1960.
- Scobie, Charles H. H. *Roberts Country: Sir Charles G. D. Roberts and the Tantramar*. Sackville: Tantramar
Heritage Trust, 2008.
- Strong, William. "Charles G.D. Roberts' 'The Tantramar Revisited'." *Canadian Poetry: Studies, Documents,
Reviews* 3 (Fall/Winter 1978): 26-35.
- Taylor, M. Brook. "The Poetry and Prose of History: *Evangeline* and the Historians of Nova Scotia"
Revue d'études canadienne/Journal of Canadian Studies 23.1/2 (1988): 46-67.
- Toye, William, ed. *The Concise Oxford Companion to Canadian Literature*. London: Oxford UP, 2001.
- Woodcock, George, ed. *Canadian Writers and Their Works: Essays on Form, Context, and Development: Poetry*.
Downsview: ECW, 1983.

主指導教員（佐々木充教授）、副指導教員（高木裕教授・金山亮太准教授）